

淡路島日本遺産の活用

竹内通弘

一 「国生みの島・淡路」

淡路島は、兵庫県南部に位置する瀬戸内海最大の島である。北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡の三海峡に囲まれており、畿内に通じる交通の要衝として古くから重要視され、古代には南海道に属する淡路国として、六六ヶ国の一国であった。現在は、行政単位として北から淡路市・洲本市・南あわじ市の三市に分かれている。

淡路島は、これまで「国生みの島」として観光PRを行ってきた。これは、現存する最古の歴史書『古事記』の冒頭に記されている国生み神話に因るものである。そこには、伊弉諾尊、伊弉冉尊が、生まれたばかりの混沌とした大地を天沼矛で

「塩コオロコオロ」とかき回し、矛先から滴り落ちた雫が固まって生まれたおのころ島に降り立ち、最初に生まれた島が「淡道之穂狭別島」、つまり淡路島と記されている。これから、淡路島は「国生みの島」として島内外に発信し、島民の重要なアイデンティティとして認識されてきた。

二 淡路島の日本遺産認定とストーリー

右記のとおり、淡路島は「国生みの島」として島内外に発信してきた。しかしながら、「なぜ淡路島が一番に生まれたのか」については、深く調査研究されてこなかった。

平成二八年（二〇一六）に日本遺産に認定された、淡路島のストーリーは、この問題に真正面か

ら取り組み、『古事記』成立以前の「海人」と呼ばれた海の民の人々の存在にたどり着いた。これらは、近年発掘調査が相次ぎ、考古学の成果が積み重ねられてきたことが大きい。

古代国家成立以前の弥生時代、畿内に先駆けて金属器などの先進文化を受け入れた海の民の存在は、平成二七年に発見された南あわじ市の松帆銅鐸によって不動のものとなった。ほかにも淡路市の五斗長垣内遺跡で発見された鉄器工房跡、洲本市の二ツ石戎ノ前遺跡で発見された辰砂を原料とする朱の精製を行った工房跡など、当時の最先端技術を淡路島の海の民が享受していたことが明らかとなつている。これは、海の民が巧みな航海術を持っていただけでなく、新しい文化を受け入れる環境であつたことがわかる。この海の民は、古代国家成立期に倭王権に重要視され、「海人」と呼ばれる集団へとなつていく。この時代、『記紀』には応神天皇の妃を吉備に送る船の漕ぎ手として集められた「御原の海人」、仁徳天皇即位前に朝鮮半島に派遣された「淡路の海人」など、王権と強い結びつきを持っていたことが知られている。



松帆銅鐸



二ツ石戎ノ前遺跡
出土石杵



五斗長垣内遺跡

しかし海人の活躍は、これに留まらない。淡路島の海岸部では、土器による塩づくりが盛んに行われる。三世紀代に本格化し、五世紀には土器の形状が脚台式から丸底式に変化、六世紀になると熱効率のよい石敷炉が導入され、量産体制に入っていく。

淡路島で生産された塩は、平安時代には朝廷の儀式である月次祭の神今食の塩に、淡路島の塩を使うことが『延喜式』に定められており、淡路島

の塩が朝廷でも特別に扱われていたことがわかる。この他にも山の幸、海の幸に恵まれた淡路島は、朝廷の食膳を司る「御食国」として、都の暮らしを支えた。海を越え、先進文化を受け入れた海人の活躍が、淡路島を「特別な島」として記すことに繋がり、豊かな食は今日まで受け継がれ、訪れる人を魅了し続けている。これら悠久の歴史が『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」(古代国家を支えた海人の営み)として日本遺産に認定された。

また洲本市では、平成三〇年に日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の追加認定を受けた。北前船の豪商高田屋嘉兵衛の出身地であることが主要因である。嘉兵衛は、商人としてのみならず、クナシリーエトロフ間航路を開拓し、ゴロヴニン事件では、囚われの身であるにも関わらず、交渉により日露間に友好をもたらした英雄である。嘉兵衛は、巧みな航海術で王権を支え、大海原へ飛び出す淡路の海人の血を引き継いでいたのかもしれない。

三 淡路島日本遺産委員会

日本遺産の事業については、淡路島日本遺産委員会が実施している。組織の構成は、淡路三市、兵庫県淡路県民局、淡路島くにうみ協会、淡路島観光協会、淡路青年会議所、淡路広域行政事務組合によって構成されている。このように当委員会には、市域を越えた行政組織のみならず、民間団体も入った官民一体の組織となっている。



淡路島日本遺産委員会

四 淡路島日本遺産の事業

(1) 平成二八年度事業

認定を受けた初年度は、まず淡路島が「日本遺産」に認定されたこと、そしてその認定されたストーリーを島内に周知することを心掛けた。主な事業は以下のとおり。

- ① 情報発信・人材育成事業
 - ・ ホームページ作成
 - ・ 案内解説書（冊子）作成
 - ・ ボランティア育成講座
 - ・ ポスター・チラシ作成
- ② 普及啓発事業
 - ・ 日本遺産認定記念フォーラム
 - ・ モニターツアー
- ③ 調査研究事業
 - ・ 海人等調査研究
- ④ 公開活用のための整備事業
 - ・ 構成文化財案内看板作成

初年度としては、ホームページや冊子を作成、日本遺産を広く周知し、日本遺産認定記念フォーラムでは、「天翔創生神楽」を製作、淡路島の魅力を発信した。また構成文化財について、現地にQRコードを付した



天翔創生神楽

案内看板を設置した。ボランティアガイドについては、観光客をおもてなしのできる人材を育成するため、講習会を実施し多くの方に参加いただいた。日本遺産認定を周知することは達成したが、新たな課題も出てきた。それはストーリーの難解さである。日本を語る上で欠かせない歴史であるが、神話を考古学により立証するストーリーは一般的には難しく、子どもや外国人観光客にもわかりやすいストーリーの解説書が必要であると感じた。

(2) 平成二九年度事業

前年度の反省点を踏まえ、島民にストーリーの理解度を深化させること、そして島民全体で淡路島をPRするため、島民が参画する事業を計画した。主な事業は以下のとおり。

- ① 情報発信・人材育成事業
 - ・ 公式ウェブサイト の多言語化対応
 - ・ 雑誌の特集取材による日本遺産情報発信
 - ・ ワークショップ及び島内報製作
 - ・ ボランティアガイド育成

②普及啓発事業

- ・日本遺産フェスティバル
- ・構成文化財解説書作成

・淡路島日本遺産RPGアプリ製作

③調査研究事業

- ・嗜好性調査
- ・海人等調査研究

④公開活用のための整備事業

- ・各市資料館の常設展示の強化
- ・サイン看板設置

前年度の反省点を踏まえ、島民に日本遺産のストーリーの理解を深化させるため、構成文化財を解説した教科書を作成、ボランティアガイド育成にも活用した。また、島民参加のワークショップを開催し、淡路島日本遺産に因んだ商品を開発、フェスティバルでブース出展し、島民参加型の事業が実現できた。

また活用事業のみならず、ストーリーの土台となる海人について、ひょうご歴史研究室と連携し、調査研究が行われた。その成果は、シンポジウム

で発表され、多くの方に淡路島の魅力を発信できた。



構成文化財教科書



フェスティバルのブース

(3) 平成三〇年度事業

三〇年度事業については、現在実施中であるが、主要事業については、サポーター制度の発足である。当初は、淡路島日本遺産のボランティアガイドを養成する講座を実施していたが、個々の構成文化財にはそれぞれに既存のボランティアガイドの方が既に活躍されている。既存のガイドと新規のガイドを融和させ、淡路島の観光に活かしていくため方針を修正し、日本遺産事業について協力を支援いただける方をサポーターとして登録し、事業を推進していく淡路島日本遺産サポーター制度を発足した。

五 未来に向けて

淡路島日本遺産委員会は、これまで主に行政単位で行われてきた観光事業・文化財活用事業が、市域を越え、「淡路島」というブランドをどのようによすれば島外に発信できるのか、それぞれの枠を超えて協議する場となった。人口減少が著しい中、未来の淡路島の方向性を示すメルクマークとなるかもしれない。

淡路島の人々にとって、「国生みの島」は島民の郷土に対する誇りである。しかし今後は、その誇りを内に秘めるだけでなく、外側に向けて発信していく必要がある。日本遺産を島外に広く発信し、観光客の誘致促進に活用していきたい。次年度以降は、東京オリンピック・パラリンピック、関西ワールドマスタースターズゲームズ、大阪・関西万博と世界規模のイベントが予定されている。来るべき時に向け、島民一丸となって淡路島の魅力を発信できるよう、事業を加速していきたい。

最後に、当委員会にご支援ご協力をいただいているひようご歴史研究室の方々に、お礼と引き続き

き事業の連携をお願い申し上げ、報告とさせていただきます。